
異世界奴隷

涼風黒兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界奴隷

【Nコード】

N0096BA

【作者名】

涼風黒兎

【あらすじ】

異世界トリップしたはいいけれど…恐らく奴隷って奴なんだろう。色々不満はあるけれど…死ななきゃ安いつて奴だ。

異世界へ

「はあ、俺が何したって言うんだか」

呟いたのは鉄格子の内側。

牢屋の中の上に、手錠までかけられた状態。

更に、予想するならば此処は異世界。

「確かに、真つ当とは言えない人生だったけども、此処まで悪化するとは…」

異世界トリップの基本は魔法でだったり神の恩恵だったりで言葉が通じるってのがお約束。

だが、俺にはそんな能力も無く、いわゆる異世界チートも存在せず。更にステータスが見れるなら”不幸”の称号が付いてるんじゃないかってぐらいだった。

「どうせ、今日も何も無いんだろうな」

格子の向こうに広がるのは異世界の風景 なんかじゃなくてただの石の壁。 なんかじゃなくてた

薄暗い石造りの廊下の壁で、首を回せば両隣にも似た様な格好をした男の姿。

…つまり、俺は異世界で奴隷って身分に身を落としたって訳であった。

どうせ客が来ても何を言ってるか判んないし、こっちからの言葉も通じないだろうし…

寝てるとムチでしばかれるっばいから、回想でもしてる事にしよう。

そう、あれは三日前の事。
俺はバイトから家に帰って来る最中の事だった。

「あー…今日も良く働いたわー」
バイト先^{コンビニ}から出た所で伸びをする。

働いた、と言っても人も中々来ない深夜帯の上にまだ夜が明け切る前、まだ深夜って呼ばれる時間帯までのバイトだから楽なだけだ。

とりあえず煙草に火を点けて帰る前にバイト先の前で吸って行きたいが…店の中から後輩が睨み付けて来るので諦めて帰ろう。
歩き煙草はマナー悪いから皆やっちゃダメだぞ
なんて考えながら通りなれた帰り道を歩いていく。

「あ、そうだ…」
帰り道の途中にある自動販売機の前で立ち止まる。

今日は廃棄の弁当しか無く、飲み物はバイト先で買っていない。
故に買っておこうと自販機の前で財布を取り出そうとして、金属が落ちる音がした。

「あれ、財布から小銭落としたか？」
眩きしゃがみこむと自販機の下に金属らしき光が見える。
落とした小銭か、誰かが落とした小銭か知らないが気にする事は無い。

拾ってしまえばこっちの物だ。
「…ま、届くだろ」
手を伸ばせば金属独特の冷たさが指に伝わって。

そのままぐるりと世界が回った。

「は？」

酩酊するような感覚。

まるで吐き気を覚える様な感覚の中、世界が切り替わり背中から地面に叩きつけられた。

「……………気持ち悪いし、今何が起きた？」

気持ち悪さを抑えなんとか起き上がれば、パツと見森の中。

明らかな異世界トリップである。

「わーお……………こんな異世界トリップ、神隠しって言うかなんだろ
うな」

気持ち悪いが初…いや、何度もあつたらそれはそれで嫌過ぎるが…
異世界に興奮気味である。

「いわゆる異世界チートって何か無いのかな…それに美少女の出会いとかさ！」

立ち上がり辺りを見回しても暗闇には木と草、それに地面しか見えない。

なにやら空気は美味い。

排気ガスなんか汚染されていないからだろうか。

昔、林間学校なる行事で行った八ヶ岳や、富士山の周りのなんとか
とか言う山と似た様な感じだ。

いや、そんなに記憶に残っている訳じゃないが。

「ま、なる様になるだろー」

と、とりあえず温める機械も無し、賞味期限が近いと言う事で手に
持った弁当を食べる事にした。

数分後食べ終わる前にとある、出来事により、必死になって木を上
っていた。

……………日本じゃないし、自然の中だし、気をつけるべきだったんだ
よね。

「やばい、でかい、怖い、オオカミとかマジ怖い、犬じゃなさそうだしやつぱりあれオオカミだよな」

姿を現したのは1メートルほど？の体長を持つ大きなわんこ…では無くて恐らくオオカミの群れ。

半分ほど残っていた弁当は既にオオカミの腹の中。

まだ、お腹を空かせたらしいオオカミさん達は勿論俺を狙って木の下に。

木の下ではオオカミがガリガリと木の皮を削ったり、唸りながら木の周りをグルグルと回ったりしている。

「そのまま、バターになっちまえ」

毒づいた所で何の影響も無い。

とりあえず数を数えてみれば8匹。

そりゃ大の大人が食べて二つとか食べれる弁当の半分程度じゃ8匹のオオカミの胃を満たすには勿論足りない訳で。

「さて…どうするかなあ」

異世界チートがある、と言うのならオオカミ8匹程度どうとでもなるだろう。

但し、あるのかどうかは命をベットした危険な賭けだ。

流星に異世界に来て数十分で死ぬ、なんて事はしたくない。

ならばどうするか？

決まっている、生き延びる為に足掻くだけである。

「誰かー助けてくれー」
叫ぶ。

誰か人が通ってくれば助かる事もあるかも知れない。

そうでなかったら、オオカミが飽きるまで此処にいるか、オオカミのお腹の中にインって事だ。

喉も渴いてきたから、そう長くは持たない。

「誰かー！誰か助けてくれー！」

武器も無し、戦う術も無しの日本人じゃこんな物だと言う事だ。

暫く叫び続けていると、オオカミの何匹かが耳を立てたのが見えた。ドツ！つと言った感じの鈍い音を立ててオオカミが突然倒れる。突然の事で何が起きたのか判らなかつたが、オオカミが散る。

誰かが助けに来てくれたのだろうか。

喉も嚔れ始めている状況ではありがたい事だ。

「た…助かった、かな？」

森の中に見えた明かりに辺りを見回し危険は無いと判断し木を降りる。

歩いて来たのは”如何にも”な数人の冒険者、あるいは傭兵の姿。どちらかと言えば傭兵の方がしっくり来るかも知れない。

リーダーらしき人物は背に斧を背負い、胸と腕に金属製の鎧を身に着け、上体には革らしき鎧を着こんでいる。

と言った感じで数人の人物が居た。

彼らは皆金髪や、茶髪…一人は緑色の髪（光合成でも出来るのだろうか）で、明らかに異世界だろうなと実感できる。

異世界だろうし下手な行動は取れないが、お礼をするぐらいは問題ないだろう。

「助かった、ありがとう」

短く言って頭を下げる。

異世界なら、これだけでも物語が進むものだ。

頭を上げるとリーダーらしき男が何を言っているのか理解できない…といった様子で顔をしかめて、後にいる連中も何だか判らないと言った様子でひそひそと話し合っている。

…え、まさか言葉が通じないと言った様な状況だろうか。

リーダーの男がため息を吐く。

「
」

何かを言うが、理解できない…英語も中学生レベルでしか判らない俺に判別しろと言われても困るのだが、俺の知っている言葉では無

かったのが事実。

つまりは、日本のあった世界…世界の名前は判らないが…つまりは言語形体が違うと言う事だ。

「
」

リーダーの男はやれやれと首を振り手招きをする。

とりあえずは付いて来いつて事なんだろう。

「わかつ」

頷いて、通じないだろう言葉を放った瞬間に頭に強い衝撃を受けた。一瞬だけ見えたリーダーの男の口元に下卑た笑みが浮かんでいたのは気のせいだろうか。

目が覚めると其処は馬車？であろう中でした。

夜は明けて、明るい日の光が流れる景色を映している。

衣類は剥ぎ取られて居なかった物の、明らかな牢屋の中で、鉄格子が世界と隔てている状況。

簡単な手錠がかけられていて、その先には目に光の無い少年。

これはつかまつたと言う奴だろう。

しかも異世界に於ける最悪のパターンで。

…でも暴れたら、悪くなるだけだから、と言う思考。

「…お、ポケットの中のものも無事だ」

呟く。

隣の少年がちらとこちらを見た気がするが、気にせずに煙草とライターを取り出す。

どうせ見つかつたら奪われるだろうと言う覚悟で煙草を啜え、ライターで火を点ける。

深く、肺の中に紫煙を吸い込む。

少年が目を丸くしている。

ライターが魔法のアイテム、あるいは超便利グッズとして見られるのは異世界の常だから仕方無いか。

「お、リーダーさんだ」

馬車の外に先程？のリーダーの姿がある。

護衛だろうか、何て思いながらボーっと見ているとリーダーらしき男と目が合う。

多分啜えている煙草に眉をしかめつつも見なかった事にしたらしい。どうせ良くあるパターンで黒髪に黒目は忌避すべき対象として、とかなんだらうな。

「…何にせよ生き延びただけ僥倖だ、剣呑剣呑」

意味は合っているか判らないが呟いてみる。

そうして、流れる景色を見ながら一日が過ぎた。

途中で出された食事はまさに人が撲殺できそうな硬いパンに薄い塩味の豆入りスープ。

食事が出るだけありがたいと、もそもそと胃の中に収めた。

数日後、街らしき場所に着き俺はいわゆる商館らしき場所に運ばれた。

そして牢屋に入れられて、現状に至る…と。

幸か不幸か、服なんかはそのままで、荷物も取られなかった。

それだけが救いかな、等と思いつながら薄暗い石畳の廊下を眺めながら今日も一日を過ごす。

異世界らしいといえば異世界らしいが俺はこんな異世界トリップは望んじやいなかった

異世界へ(後書き)

1 / 4 サブタイトル変更

牢屋の中で

「……………暇だ」

誰にとも無く呟き、石畳の廊下の壁を見る。

手錠をかけられ壁から離れる事の出来ない状態では、身体を動かす事すらままならない。

恐らく…と言うよりほぼ確実に俺はいわゆる”奴隷”と言う状態なのだろう。

いわゆる奴隷商が俺を売ったのか、傭兵が冒険者（この世界に存在するのかどうかは知らないが）と言った連中が小遣い稼ぎに売り払われたのかは知らないが。

数時間置きに高そうな服を着た連中が通るのを見ている。

俺を見るたびに眉をひそめ、顔をしかめているのはどうせ馬車の中でも思いついた”異世界に良くある黒は穢れの色”とかそう言う理由ではなからうか。

更に言えば黒目黒髪と言う外見は基本存在しないだろうと、当たりをつけている。

なぜなら通りがかる”買い物客”も”売り物にしている商人”も、”お隣さん”でさえ黒髪は居ないという所からの思考であるが。

大体の髪色は俺を売り払った連中と似た様な髪の色。

そしてこの世界がこの辺りでののかは判別できないが、緑色の髪は比較的メジャーだと言う事が判った。

だから、どうしたと言う話ではあるが。

「しっかし暇だなあ…」

壁に貼り付けられているだけの状態で暇じゃないと言える人間が居

たら俺は喜んでその人間と入れ替わってやろう。
更に言えば、これからどうなるのか全く判らない状態、死ぬよりは
マシ程度の状況が待ち構えている中、気楽に構えられる人間と言う
訳でも無い。

内心完全に怯えている状態での、眩きである。

食事は馬車の牢屋の中で出されていた様な薄い塩味のスープ（豆は
こちらでは入っていないが）に硬いパンが二切れ程。
良く切れたな、と思う。

こちらではこれが普通なのかも知れないが。

馬車の中での待遇は豆が入っていた上に、パンは一つ丸々と出た事
からそれなりには良かったんだろう。

「ああ暇だ、暇に暇して、暇すぎる」

何度目か判らない暇の眩きを五七五で眩いた時に廊下に通じる扉が
開いたのが判った。

生憎俺の入れられている牢屋は扉から離れているため、音での判別
ではあるが。

足音が聞こえてくる。

今日何度目だっただろうか。

判らない言葉で説明しているのであろう言葉のやり取り。

ああ、またか……等と思いながら通り過ぎるのを待つ。

どうせ、虫を見る様な目で見られるのは判っている。
なら見ない方がまだマシだとうつぶいたまま通り過ぎるのを待つて
いた。

が、足音が目の前、牢屋の外で止まった。

今まではただ通り過ぎる中、今回ははつきりと”この牢屋”の目の前で止まっていた。
顔を上げる。

何時も牢屋の中を先導してくる男が一人。
こいつは良い、恐らく商人だと判っているから。

着いて来た二人にかなりの違和感を覚えた。

身なりの良い、というよりもまるで執事服を着た男が一人。

金髪に碧い瞳をした顔立ちの整ったイケメン執事。

まるで絵の中から出てきたようなイケメンっぷりに、元の世界じゃなくてこつちの世界でもモテてるだろうなと言った容貌。

今まで見た人の中で一番のイケメンだと判る。

いや、イケメンの説明は良い。

それよりももう一人の方だ。

そちらの方が俺に違和感を抱かせた。

まず、第一に目に付く銀：いや、白髪と言った方が正しいかもしれない。

そして低い身長、目測だが150センチ無いんじゃないか？と言った所。

瞳の色も白、いやこちらは銀と言つべきか。

更に良く見ればオッドアイ、右目が白で左目が赤。

いわゆるファンタジーなら二つ属性持つてるとかそんなんじゃないかなあと思いつく。

服装も明らかに身なりの良いと言ったレベルでは無く、高価であるう白を基調とし、金の刺繍を加え前掛け…と言つのだろうか、ともかくその部分が赤い布で銀と金の刺繍。

明らかに今の俺とは遙か彼方の、まさに天を突き抜けたレベルの高い地位に居る人であると理解する。

と、まあ此処まで言っておいてなんだが、端的に言うならば”物凄く地位の高い位置に居るであろう幼女”だった。

少女と言うには余りにも顔立ちが幼い感じであるが故に少女と表現したまでであって、別に幼女愛好者ロリコンと言う訳では無い。

いや、例え俺が幼女愛好者ロリコンだったとしても、『YESロリータNOタッチ』を貫く紳士であり、別にこの目の前に居る幼女がピンポイントでストライクだとかそんな訳では。

自分に嘘を吐くと言うのもかなり馬鹿らしい話だと自分に言い訳していて気がつく。

確かに幼女愛好者ロリコンではあるが、だからと言ってこの壁に繋がれていると言う状況がどうにかなる訳では無い。

確かに、今俺の牢屋の前に立っている事から開放される事も零ではないかも知れないが、ただの気まぐれだろう。

そう思わない事には、彼女達が立ち去った後うなだれる事を考えての後ろ向き《ネガティブ》思考ではあるが。

「

「？」

「

短いやり取りの後に、商人が扉を開ける。

疑問符が付いたかどうかぐらいは流石に判る。

それはともかく、俺に向かって幼女が歩いてくる。

執事が何か言っているが、俺には言葉も判らないし、俺にかけられた言葉じゃないだろう。

「

幼女の瞳がしっかりと俺の目を見る。

何を言っているのかは判らなかつた。

「」

「何を」

俺が言葉を言い切る前に幼女が一步踏み出して。

そう、何を思ったか幼女は俺に抱きついてきていた。当たり前だが困惑する俺。

「ま、待った！俺ほら！此処に居て風呂も入ってないから！」

抱きしめられて慌ててもがく、が幼女は離す気が無いらしく、もがく俺を見て頬を膨らませる。

ああ、凄いかわいい。

ってそうじゃなくて、諸君らならば幾ら俺が『YESロリータNOタッチ』を掲げる紳士であろうと、この状況（壁に手錠で縛り付けられている）ならば抱きしめられても仕方無いと思っただけだと信じている。

と言うか、どうしようもない。

嬉しい、確かに幼女から抱きしめられるなんて今迄の人生では有り得なかつた。

しかし、せめて、せめて風呂に入って汗臭さやらなんやらが無い状態で抱きしめられ…って、違う。

「落ち着け、落ち着け俺……………」

離す気が無さそうな幼女に諦めて抱きしめられたまま呟く。

勿論伝わっている気はしないが。

抱きしめるだけでは飽きた？のかじつと俺の顔を見つめてくる。

そこから手を伸ばして俺の頭を抱え背ると、伸びをして口を尖らせ
…ってそれはダメだ。
必死で（とは言っても力の差は歴然だが）幼女の腕の力に抵抗して
お付の人っぽい執事に助けってくれと哀願を送る。
いつそ商人でも良い、この状況を、この俺からどうしようも無い状
況を何とかしてくれ。

牢屋の中で（後書き）

1 / 4 サブタイトル変更

牢屋を出たけれど

「何がどうなったら、こんな状況になるんだ…？」

俺が居るのは牢屋の中………では無く、白を基調とした立派な一室。その部屋の中で、幼女と向かい合った状態で紅茶にクッキーが置かれるという、明らかに奴隷の身分では無い待遇を受けてい

た。

幼女の後ろにはイケメン執事も立った状態で待機しているし、何がどうなってるようになっていいるのかは一切判らない。

幼女が手を付けない（状況に戸惑って付けられないとも言えるが）俺を見て、クッキーを一つとってまるで、

「はい、あーん」

とでも言うかの如くに差し出してくる。

いや、流石に食べる訳には　と、思っていたら幼女の瞳に涙が溜まる。

泣かせるのは食べないよりもマズいだろうと慌てて、幼女の持ったクッキーを食べる。

………うん、美味しい。

食べた後はニコリと微笑みかけるのも忘れない。

たったそれだけの行動で、幼女がまるで花が咲き誇ったかのように笑顔になる。

あえて、もう一度言う。

何がどうなっただらこんな状況に陥るのか、誰か教えてくれないか。少なくとも、いや間違え無く奴隷には分不相応な環境であり、こうなった理由が全く判らない。それを知る為には少なくとも昨日の牢屋の中の話の続きを思い出さしか無い訳で

俺の首を抱きしめて一生懸命背伸びして口付け（と言うよりキスと言った方が良いのか）をしようとしている幼女は非常に愛らしいが、俺は紳士であるが故に、手出ししないと心に決めている訳で。

助けてくれと視線を送っても執事はニコニコと微笑み幼女の行動を見守っている。

商人は”商品”である俺の状況に戸惑いながらも、この幼女の”地位の高さ”から手出しが出来ないと云った様子で。

恐らくではあるが、この幼女……この商人の商売を一瞬でとり潰せる程の権力チカラを持っているのでは無いかと、この状況に至り思いつく。

と言うより流石に軽いとは言え、幼女：大体10歳ぐらいの幼女の全体重をかけたハグを首にかけられては俺もそろそろ限界を迎える訳で。

いや、目測年齢10歳程が幼女と言うかどうかは人によって……いや少女と呼んだ方が良いのかも知れないが見た感じの幼さとして幼女の方が合っている気がするので。

ともあれ、少しでも下を向けばそのまま幼女の口付け（いや、嬉しいが……嬉しい事は嬉しいが！）が待っている。

と言うより、そのまま頭突き状態になって幼女を傷つけてしまうのでは無いかと言う恐怖がある。

次第に首がプルプルと震えて来る。

「も…もつだめ…だ…」

ガク、と力が抜け幼女の顔が近づく。

走馬灯……では無いが、ゆっくりと顔が近づくのが見える。

目を閉じ幼いながらに頬を染めて唇を突き出し待ち構えているのが見える。

ああ、俺の倫理ボリイはこれで崩れてしまつのだろうか。

「
」

そう思つた瞬間に幼女の首…いや、身体がガクンと崩れ落ちる。

聞こえてきたのは恐らく執事の声。

何があつたのか判らないが、力が抜けたのは間違い無い。

もし、俺の両腕が自由だったならば、目の前の幼女を抱きとめていただろう。

自由にならない両腕が今この瞬間は恨めしい。

近づいて来た執事が俺の首から幼女の手を放し、お姫様抱っこをする。

それはまるで絵画の1シーンの様に。

俺ではこの二人の様に絵になる様な事は無いだろうと思う。

そう、俺では無理だろうな…と。

幼女の原因は判らないが意識までは失ってないらしくこちらを、いや俺の目をジッと見つめる。

何が目的なのだろうか、彼女達は。

と、その合間を見て商人が近づいてくる。

「
」

そして、俺の首に首輪を有無を言わせぬ速さで取り付ける。首輪は締まる様な事は無く俺の首にフィットする。首周りが締まる物自体はとても嫌いなのだが。執事が幼女を抱いたまま、近づいて来ると幼女が首輪に口付ける。それを切っ掛けとして、淡く首輪が光り　俺が幼女の奴隷だと、俺の頭の中に刷り込まれる。どうやらこの牢屋からは自由にしてくれるらしい。幼女の物になると言う代わりに。

それからの行動は早かった。手錠を外され、着いて来いと言った様子で俺を引きつれ、応接間らしき部屋に連れて行かれる。

執事が商人に数枚の硬貨を支払う。価値がどの位なのか判らんが、俺の価値はテーブルの上の銀色の硬貨からすると銀貨4枚に銅貨が5枚らしい。

釣りを出さなかった所から見ると、丁度と言った所なのだろう。それから俺を引き連れ、幼女をお姫様抱っこしたまま外に止めてあった高級そうな馬車に乗り込む。

夕々に出た外は日が暮れ、夕焼けの赤い色に染まっていた。いや、高級そうでは無く高級なのだろう、間違い無く。

執事が俺に乗る様に手招きする。
…良いのだろうか、まあ…主人である幼女のお付の執事が良いと言ってるのだから良いんだろうが。

「し、失礼しまーす…」

恐る恐る乗り込むと、執事が向かいの席を指し座る様に指示してくる。

一つ頷き執事の向かいの席に座ると体調が良くなったのか幼女がぴよんと座った俺の膝に乗っかって来る。

少なくとももう元気らしい、それはとても良い事である。

…まあ俺に抱きついて、頬を染めているのでまあ…元気なのだろう。抱きつかれたまま、窓から外の景色を眺めていると商業区らしき場所を抜け、住宅街へ…それも抜けてやたらと高級そうな住宅街へと入る。

地位は高いんだろうと思っていたが…少なくともいわゆる”貴族”なのだろうか？

しかし、その高級住宅街も抜けて…堀を越える。

馬車が止まったのは、どうやら………城。

王城なのか、一地方の城なのか俺には判別出来ないが。

幾人もの兵士に守られながら城の中にある神殿の様な場所へと通される。

その間、幼女は俺から離れずにお姫様抱っこを強要されていた。

そして、その神殿の奥にある部屋に通され…俺の腕から落りた幼女が引つ張ってベッドのある部屋へと連れて行かれる。

え、まさか…と思いつながら内心冷や汗が流れる。

幼女の指示で椅子へと座らせられる。

幼女が部屋から出てしばらくすると着替えて戻ってくる。

先程の服とはかなり変わって、単純な服であり、どうやら寝巻きらしい。

もう、幼女は寝ると言う事らしい。

…何故座らされたんだろうか。

幼女が目をこすりながら、相当大きなベッドへと入って行き…開いているスペースをパンパンと叩く。

来い、と言う事なのだろうか。

「…っ」

首を振って流石にそれは駄目だと言つ意思を示すが、じとーっとした目で見られる。

眠いせいなのか、目が据わっている。

はあ、とため息を一つ吐いて、寝かしつければ良いかと諦めてベッドに座る。

しかし、幼女の視線は変わらない。

どうやら横になれと言つ事であり、そうしなければどうなるかたまたたもんじやない…と言つ言い訳の元に幼女の隣に横になる為に盗られなかったジャケットを脱ぐ。

流石に、それ以上脱ぐ訳にいかないのもその格好で幼女の横になる。せめて風呂、あるいは身体を拭くぐらいはしたかったんだが仕方無いと諦め、幼女の横になる。

物凄いふかふかの布団の上で抱きついて来られるが、まあ…幼いと言つ事で色々和我慢する。

抱き疲れている上に腕枕と言つ状況で、横になっている状況で幼女が目を閉じる。

俺も付き合つて軽く目を閉じて

「ハッ！」

気付くと夜が明けていた。

そして、現状に至る…と言っ事だ。

あえて言おう、本当に…どうしてこうなった？

牢屋を出たけれど（後書き）

未だに主人公は言葉が喋れません。

何時になったら主人公のみの独白から解放されるのでしょうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0096ba/>

異世界奴隷

2012年1月4日22時49分発行